

天明六年『花供養』

花供養

底本・糸井 校異・白鹿

翻刻担当・京都俳諧研究会

(表紙・原題簽)

(表紙見返し)

丙午花供養

蕉翁桜木の尊像に

花を奉ること、年毎の日に

なんめぐり来にければ、

おのおの草堂に つどひて

しづかさや真くづが原も花供養

春日照り添ふ像の衣手

蜂の巣に袋きせ置掃除して

闌更

渭川

有庸

(初才)

口のきたなき男どもなり

舟の興竹の筒より酢の出る

黒瑚珠といふものを送りぬ

月のもと机も紙も露にそみ

父母となく虫の居にけり

余略

葵

車蓋

南栄

白岱

其成

(初ウ)

酒飲は下主になりよし花の山

花の雲都の不二も詠あり

花ちるや雀の狂ふ昼下り

花咲て山口しるき家居哉

幕取に走る野中の桜かな

山挽の木地に咲也奥の花

花のちる日比はうかれ心かな

渭川

南榮

蛙面

平吞

角蜂

東雨

其成

其中に浅黄桜の栄耀かな

此上は散る風に来んさくら花

絶てなくばとはいふものゝ桜かな

しらぬ道問はで行けり山桜

杣が子を道の案内や山ざくら

花咲や何思ひける僧一人

夕桜花に酒ふくおのこあり

瀧の花ならびてうつる日影哉

葵

喜竹

杷柳

夫木

一木

仙牛

言道

長広

(一ウ)

酒提てとへば留主也花の宿

桜戸や半分明て兎の顔

おもしろやあき樽よせて夕桜

咲や花入日照添ふ顔の色

桜狩命こぼしつ酒二合

迷ひてぞ世は面白き桜かな

おしろ着た小町に花の散る日哉

惜しや桜いとま申せの鐘の声

志諺

女 紫蘭

尼 得終

女桃

月峰

定雅

在貫

百栄

(二才)

曇なき空は錦の花見かな

笈士の宿さがしけり花の奥

遠近や花を隔つる曲り道

散花や切飯分る天窓数

般若読口へちり込さくら哉

花の里花もたぬ子もなかりけり

散かゝる桜におかふ童べ哉

花守や衣を洗ふ苔の水

(二ウ)

女

吞鳥

みほ

甫尺

、

車蓋

有庸

羅外

文堂

路春

初桜遙に寒し猿の声

眠江

片心花に通ふや風の音

曾陸

花ちるや松の梢を吹過る

白黛

諂はぬ色ぞ自然の山桜

玄子

ちる桜有やうれしき嵐山

巴凌

代を潜む児麗しや山ざくら

嵐月

心なや桜にかけし牛の沓

我春

(三才)

毛氈も筵も花の座敷哉

掛茶屋が訛も侘し山ざくら

花の庭踏あらしけり上童

老人の本性見たり花の下

桜ちる山静なる詠かな

小原女のしらぬ哀や日枝の花

長生を人のうらやむ花見哉

花の中に哀をつくす鼓弓哉

鄙雀

如此

一峰

芽木

兎石

南路

南我

百明

(三ウ)

十二八

人の気の皆むつまじき花見哉
散る花や鏡の池の見えぬ程

女
ちよ
曉山

かゝる日をまこと心や雨の花

重厚

械投る音もはるかに山桜

大溪

幕打て人の巢になる桜かな

かゝし

道芝に誰筆やそも花曇

寄☆

花の蔭見ぬ世の花ぞ慕しき

花街

(四才)

常にさへ遊ぶに花の東山

鐘楼守酔せていなん花の暮

人はいさ花に幾代の幕のゆれ

花ならぬ花や誠の花見女郎

酒買に宇治へ出けり山桜

子をつれた人はまれ也初桜

杣一人花に暮たる山路かな

在京

杜市

松磨

ダイゴ

百哺

踏月

夕烏

(四ウ)

又よその花見る山や山の上
旅人も宿をはづれて花見哉

鼠角
狐来

哀さは寝に去ぬ鳥と散花と
我は迷ふ立名もあり花の山
手折らめや唯末の花も匂ふなる
初花やそゞろに寒き片原野
花堤て行子に道を除にけり

ヤワタ
斗流
古律
南化
龍子
クヅハ
不染

魂は山をはなれてさくらかな
明がたや雲の下より初ざくら
手を当て見れど嵐の桜かな
いとよる芬の煙り桜かけ
また今年花につれなき命哉

かびくさき味噌踏里や花の道
人声の桜にふかき谷間かな

大ツ 巨州

小谷 湖青

カイヅ 琴桃

新城 泉柳

、 青牛

石部 良交

、 亀洌

散花にうかうか暮る日毎かな
片里や花咲中に衣打
隈はたゞ空のみどりや花の山

菩提寺 鉄翁
平松 亜溪
女 しう

日々に城は隠れて山桜 辻村
曙や蝶より先へ花の山
桜桜また日くらしして帰りけり
夕栄や藪を見越して村の花

梅仙
紫水
拍子
梅木 鴨鳩

桜散る蔭に小者の軒哉

カヅミ

志計

手を引てつれ行花の座頭かな

成山

長刀は預けて行よ山ざくら

ヒコネ

梅支

谷一つ越て外山の桜かな

声志

咲花を独たのしむ庵かな

可笑

咲満て煙がごとし山ざくら

仁保

思声

花守や朝な夕なの花に染み

水口

蜃那

膝もとへ散花染る硯かな

蜃州

(六ウ)

侍のはかま着ぬ日や山ざくら

折入し水に花咲一夜かな

岩角や登りて手折山桜

一人二人花見て行や香煎湯

栄耀にはなりよき物か花盛り

散花にうかうか過て行身哉

心よや花に日毎の山廻り

、
如江

、
芦角

、
素水

、
翅英

蓮車

梨風

駒井
柏由

(七才)

菅笠は麓に捨て桜かな

毛牧

三枝

川一つ越されて床し山ざくら

吾友

椽先の火箱かりけり初桜

ハマン

珎松

花の枝に長刀掛る奴かな

白子連

☆水

昼まではあだに廻りて初桜

澄水

斧の柄の朽るまでさけ山桜

荻人

山桜ちらぬほど吹あらし哉

無曲

塩竈の煙は惜しき桜かな

可計

(七ウ)

奥山やあたたら桜に道もなし
我よくやあまた所の花思ふ

女 千之

霰打

食合ふて花なちらしそ山鳥

津へ夕 梅二

雨空や翌の桜に眠りかね

米二

七つ八つの子の遠乗や江戸の花

万化

花の比関の戸ひらく仮寝哉
山里やげに人多きさくら花

一身田 支朗

☆ 阜

(八才)

持込だきのふの酔や花曇り
持かけし女ちからや山ざくら
笈士の影に迷ふやはつ桜

野田 雨降

大通 花卿

色に香に心を初る花見かな
詠でも詠でも只さくらかな
花笠を着つゝ馴にし舞子共
諸人の声ちる花のあらし山
雨雲はさばけて花の夕かな

津 文波

有方

架橋

楚鴻

文袋

散る花に心留るや酒の中
花満て朧も諸肌ぬぐ日哉
酒売に花のちり込音羽哉

植岐
淇園
路鳥

蝶蝶や能うもたまつて花の中
売樽に恋しき峰や桜狩 ヒカミ

丹波梶原

洞々
文虎

店やからしる人名乗花見哉
花盛り人のあらしや渡月橋

但馬イクノ

松童
渡江

(九才)

弁当や桜流るゝはしり先

千原 夜卜

乞食の卒都婆によもの花見哉

和旦

おしめどもおしめども風の桜かな

ワカサ 梅五

神も出て在かしらず花曇

麦太

日南にも生れ付なり遅桜

谷泉

風の花心届くかたもちける

志州鳥羽 東溪

小荷駄借る京の女中や朝の花

伊勢四日市 馬曹

(九ウ)

雨の花葉がちに成て日の暮る
散や花花や此身をいかにせん
月の夜や花を出て行人の影

備笠岡

湖嵐

季山

文里

此山は此一もとで花見哉

房州磯村

倭風

山桜遠寺の鐘の闇けり

楚流

花飛て来るや煎売の膳の上

東我

庭に有花から花を見初けり

梅喜

(十才)

脱かける袖に積るや花の雪
うか／＼と花に暮たる独り哉
羽二重の肩に一枝桜かな

柳月
倭水
英

松は花の景色をそへて嵐山
日かけ／＼花ちる中の松くろし
是は誰が麦の畑や初ざくら

加賀 馬来
祖竹
麦風

嵐山桜ぞ秋の草木より

浪花 二柳
(十ウ)

ちる花を拾ひあげつゝ又一盃

散る花の庭静也夕づとめ

石二つ向ふの山や初ざくら

首筋や花見なれたるのびちゞみ

狩人も鳥見失ふ桜かな 上下仁田

わらひ合心競へよ花の旅

花の不二神の都はほとゝぎす

幾度か月に見かへる花戻り

山父

麦雅

不十

江涯

魚渚

宮崎

柳旨

朔宇

留春

(十一才)

桜咲やまがね堀山も一ざかり

甲州 牧父

山越えて咲や桜の朝ぼらけ

錦河

光さす山の尾崎や夕ざくら

静菅

暮る日や木の間に花を散し出

作良

嵐して峰に見え初る桜哉

樗冠

山風やうしろあらはす糸桜

真洞

夕栄や霏するかと桜陰

ツルガ 悦溪

(十一ウ)

花にうかれ花に静けき翁哉

五鼎

花のうへ目にたつ塔の高さ哉

丹後田辺

木越

日傘さへおもたき花のふゞき哉

梅里

夜あらしの岩根に白し花の山

洛

社牛

谷川に箸の筏やさくら時

紫桂改

芦仙

散初る鐘に影有桜かな

下総

尺艾

(十二才)

順礼の拝む座敷にちる桜

高砂 布舟

あはれ深し花咲る木の主かな

トヤマ 退冥

水も寝て夜は音あらし山桜

ヒロシマ 可友

同じくは花守の宿の枕かな

長崎 車文

いぎ臥て花の夢見ん岩枕

朝叟

桜狩よき寺見出す都かな

闌更

(十二ウ)

蕉門書林

三条通御幸町西江入丁

菊舎太兵衛梓

(裏表紙見返し)

(裏表紙)